り又臨某性たることがある、地變動の作用は鑛物生成と同時に行はれ、又鑛物生成の完了後までも繼續して行はれたことは常に共通の事情である。（未完）

屋根概說 一

藤田元春

一、はしがき

建築を別に專門としてゐるのではないが、日本民家の屋根の形式をしらべて見たいと思ふたのは聚落を構造する要素としての個々の民家の形式が一つの集團となつて、部落々々を形成するに當り甲の村で見た住宅と乙の村で見た住宅と其形式から細部まで種々特色を持つと云ふことに氣がついたからである、或る民家は餘程古い傳統に從ひ、或る民家はいかにも新進の文化？に從ひ、一見して蠻殼となり、灰殼となる、其の由來する歷史の古さとかこれを其地に導き來つた地方と都會との交通關係といつたやうなものが、偶然の屋根の形だとか、庇のつけ方とかいつたものにも窺はれる、かういふ點から一應民家を主題として、抑も屋根の形にどのやうな種類があるかと調べてみると、建築雜誌第十三集に工學士長野宇平治氏の屋根の講話がのつてゐる。氏は屋根を分類して、第一勾配に於ける屋根の種類とて、（イ）直線の屋根卽ち屋根の勾配に曲線が現はれてゐない普通民家の瓦屋

根のやうなもの、其の種類をば側面から三角形に見える單純な屋根と、腰折造又はマンザートの如く側面の多角形に見ゆる屋根との二つに分ち、（ロ）曲線を應用した場合をテリヤネとムクリヤネに分ち、前者はそつた方で我國の殿堂の飛簷といふ類の如きもの、ムクリヤネとは流れがふくらむでゐること例令ば京都の淸水寺本堂の屋根のやうなもの或は民家の藁屋根に往々其傾向をもつものがある、（ハ）複曲線を應用した場合、これは日本に例が少い印度や波斯邊の回敎建築の屋根に見るやうな種類で、我國で强て求むれば神社佛閣の燈籠の屋根にこの複雜なカーブを見る位のものである、（ニ）圓形を應用した屋根、ドームもしくはこれに近い葱頭の屋根、かういふ風に線によつて直線形、曲線形、複曲線形、圓形の四つに分類し、第二に、屋根の形から切妻、寄棟又は四阿、入母屋、方錐、圓錐、圓屋根、寶珠形の八種類に分類されてゐる。

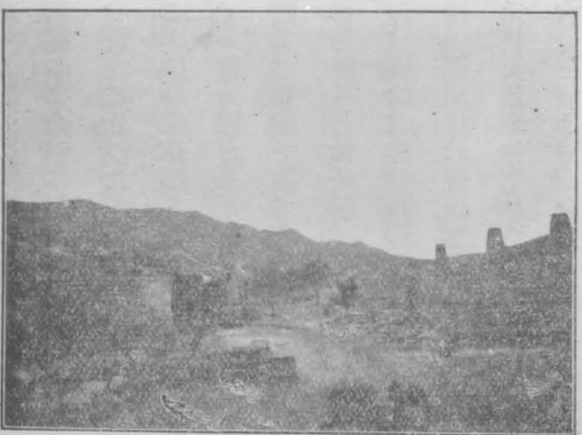
元來人類が住宅をつくつて風雨をよけるために工夫したものであるから、この屋根なるもの丶形は古今を貫き東西を通じて、大體は類似したもので、其の材料が草であり、板であり、瓦であり、皮であり、石板であり、トタン、銅、鉛など丶種類によつて外觀を異にするけれども結局は、一片流二招造、三切妻造、（兩下）、四方形造（方錐）、五寄棟造（あづまやともいふ）六片入母屋造、七入母屋造（以上いづれも或は直線であり或はカーブをもつものがある。）と、八圓錐、圓屋根、寶珠形など、とにかく圓味のある圓屋根の九種又は十種以外に出でない、世界に存するあらゆる屋根は、

この分類の中に入らぬものは恐らくないやうである。

これを我國に見るに、日本は元來木造建築の國で建物の入口とか、窓の上部が水平の横木になつてゐる木造楣式を本體とし、屋根なども直線かてりやね、むくりやね以外に出でないが、外國にはアーチの利用が多く、窓がアーチになる外に屋根に圓味のものが多い、或はゴシク風の尖塔の如く方錐の特種の場合が存在する、すべてこれはもとは雨雪を凌ぐために發達したものゝ後世に賞觀のためにかやうに變化したものであらう、實用的の方面から云へば、傾斜があまり急であつたり、圓味の多い複曲線風の屋根は、不必用であるとも考へられる。

そこで本篇主として日本に尤も多い屋根の各種の場合を一應概說して見やうと思ふのである。

第一圖



片流
山西省大同府附近寒村

一、片流

屋根の片側が上にのつてゐる場合で、北支那など雨の少い所にゆくと民家は日乾瓦を四壁に積上げて上に細い木と高粱とをのせて其上に土を四五寸ものせておく、一

方へしか傾斜しないで其傾斜も二十度以内であるこれを大陸屋根といふ、其極端の場合は水平の屋根である、圖は予が大同府から雲崗への途上にとつた寒村の片流の群落である。日本ではこの種のものは大工小屋の假仕事とか、朝鮮勞働者の當座凌ぎの假小屋位に見る丈けで普通片流の家は少い。

二、招　　造

招造り、これは片流の一方の端に一寸した緒をつけて反對の側を保護せるもので、片流とあまり變らぬが屋根が一方の側へ延びることが大きく、他の側は極めて短かい、辻便所とか、町家の中の小屋などいふ類に用ひる、これも民家其他の堂々たる所には例がない。

三、切　　妻

草葺の切妻であると中央に柱をたてゝ梁を支へる、梁の上に叉首を交叉して其上に棟桁及屋中竹を約二尺置に列べ、これに又椏竹を約一尺五寸置にかけ、簀竹又はから竹を四寸間位に配り、其上に厚く茅をのせ、其尻を鉾竹にて押へ、何れも繩にてからむ、其屋根の最高點は棟で、棟に或は千木鰹木を置き、或は死棟にするもあれば、杉皮をきせるもある、とにかく最も簡單な風雨よけはかやうに片流を兩側に組合せた屋根である、地上に三角の空間を限り、其兩等邊を茅又は板其他で圍ふて屋根にするのである、これを天地根元造といふ、これが尤も原始的な住宅である。やがてこれに四本柱を付加し、床板を張ることになつて、屋根が地面から數尺も上にあがると、これを兩下(マヤ)と

いひ又は切妻といふ。天地根元造は當然妻から入るのであつたから、地上に於て床張りの家になつた後にも、やはり妻から入るのが本體であつたと見え埴輪や銅鐸の模樣に切妻々入の繪がのこつてゐる、出雲大社の大社造りは、我國の古代住宅で杵築宮即ミヤといつた、御屋である、御住宅である、それはいかにも二間二面の妻入で、屋根に置千木のある切妻である、類似のものに大鳥造と住吉造とがある。二間二面の大社造りは心柱が邪魔になつて中央正面に神座が設けられぬ故に、大鳥造及住吉造はこれを除いて內陣外陣の二區にしてある、かうなると「ミヤ」でなくて、ヤシロ(屋代)である、屋の代用である。

第二圖

切妻
出雲大社御本殿

伊勢の大神宮は神明造のヤシロである、大社の如き妻入では奥深くなつて體裁がわるいので、こゝは切妻平入で三間二面に建てられて、中央の一間の正座に、神位を安置し奉り、庭上より拜禮することにしてある、ヤの方は住宅であるから御殿の中へ參入するが、ヤシロの方は崇拜の目的であるから御殿へ參入しないのが常法である。國學院雜誌第二十七

巻に星野輝興氏が神籬略考といふを記してこの事を明快に論じてゐられる。

しかし伊勢神宮は垂仁の朝に建つた古建築でその後傳統を失はないで、最初から平入であつたとすると、切妻の平入といふ建物も亦由來は古いとせねばならぬ、今日我國の民家で切妻のものは、大社のやうに妻入のものと、神明造のやうに平入のものと兩存してゐる、どちらが古いかと問へば、切妻々入の方が或は古い形であらうと思はれる。現在では妻入切妻は多く瓦葺の形になつて町に殘つてゐるのが多い、宇治山田市に妻入が多いのは、大神宮が平入であるから遠慮して妻入としたものと云ふが、妻入は必ずしも宇治山田市に限らないで、近畿の古い町にはこれが甚だ多い、龜岡町のごとき船井郡須知町の如き其の好例である、拙稿「京都市内に現存せる古代の聚落」に述べた通り龜岡附近では妻入の入母屋をまや卽眞屋といつて、平入の入母屋をよこやと區別して語る程に、古くは妻入が本來の民家であつた、けれども町屋のやうにある街道筋に於て、限られたる間口に家

第三圖

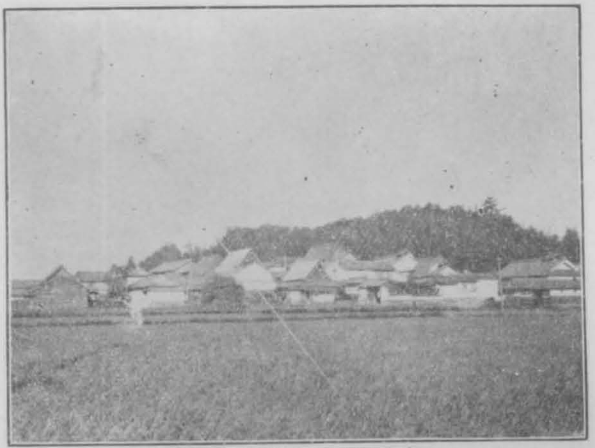
入母屋妻入
龜岡附近街村

を並べ建つる際には、自然妻入を當然としたものゝ、妻入の方は暗くて光線の工夫がよくない、平入南向の快濶なるには到底及ぶべくもないから、空間の多い田舎では、自から平入の住宅になつたらしい。

切妻平入の住宅で南向に建てるといふ風は世界的と迄いかなくとも、少くとも支那の民家などには其風をなしてゐる、我國でも奈良の平野の田舎はすべてこの切妻の平入であり、今日では京都大阪其他の近畿の市街をなす土造、瓦葺の類すべてが切妻平入である。

奈良民家の切妻は平入であるが、餘程急峻な茅葺で四十五度位のものが多い、棟には針目覆をのせ、或は瓦の箱棟をのせてゐる、其特色として切妻の兩端に防火壁がつくつてある、其防火壁が母屋の棟よりも高い時には高塀造りといひ、低い時には低塀造りといふ、第四圖は高塀造の多い川原村の景である、多くは高塀の上に烏衾といつて瓦の鳩がのつてゐる、附圖第五の一は低塀で岡寺の町の附近で新築中のを寫眞にしたのであるが、間口五間奥行三間半、低塀の右の方が

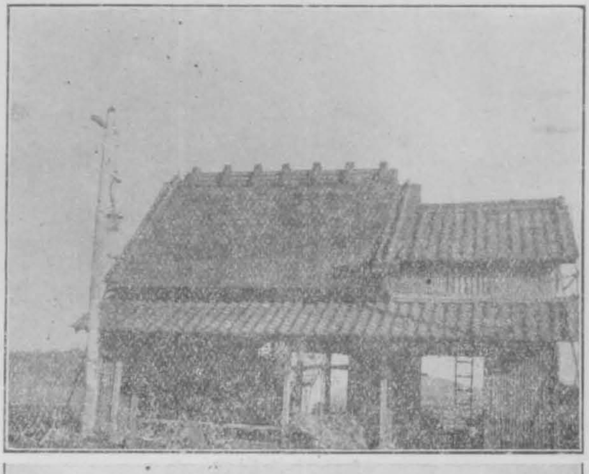
第四圖



奈良縣高市郡川原村

瓦葺の両下になつてゐるこの所の下の部分は土間で火袋といつて下に竈がある所である、故に多くはこの瓦葺の部分には櫓烟出(ヤグラケムダシ)とて一段高い切妻小屋根を持つ場合が多い(附圖五の二)、この大和の

第五圖

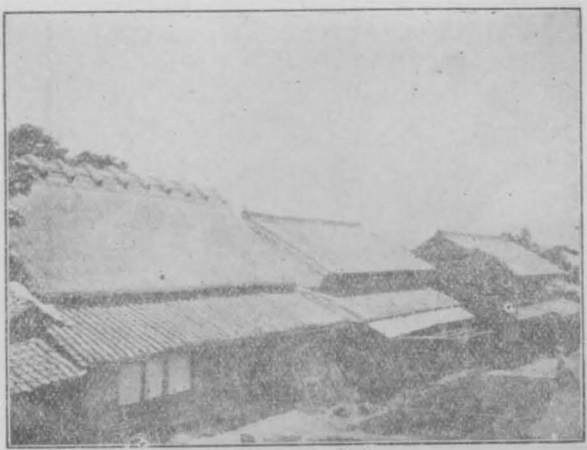


奈良の塀造民家

防火壁付切妻茅屋は見た目には餘程美はしいもので其分布は生駒山塊を中心として、東は奈良平野、西は河内平野、北は淀川木津川流域の南側に及んでゐる、川より北には分布が極めて稀なのを特色とする、多くは平入に庇があつて瓦のしころぶきである、防火壁のない場合は切妻の餘分が壁の外へでるこの處をケラバといふ、附圖第六は防火壁のない當麻寺の門前北側の町並の風である、卽左

の端が切妻ケラバ附の家で中央は瓦葺である、瓦葺の切妻平入になるとこの圖の如くに屋根の傾斜がやゝ緩くなつて三十度位に減ずるのが例である、

第六圖



當麻寺門前町

京都や大阪の市街は主としてこの種の瓦葺切妻平入の小棟作りで、さん瓦でふいてあつて、ケラバが隣の家の屋根と重り合ふのが普通である、しかし古い京都では、この隣りの家と自分の家との間に防火壁があつた、これを方言卯建(ウダチ)といふ、兩側の瓦屋根よりも一段高く抽きん出で、瓦が葺いてある、寛文五年正月版山田市兵衛出版の京雀といふ本には京都大佛八まん町の圖がある、當時の町家は瓦で葺いてなくて板ぶきであるが（後節板やの條參照）それにこの防火壁がある、天明の大火に燒けのこつた京都西陣淨福寺笹屋町邊には今も猶この防火壁卽卯建のついた家がある、三井高辰氏藏聚樂邸の屏風畫も同じくこの卯建がある、してみると奈良のこの防火壁はもと板やづくりの時代平安朝前後の都の風をうつしたものかもしれない。

面白いことにはこの卯建の風が、堺や大阪邊の市中に今も其形骸をのこして、二階建の家の窓の左右に土造の壁で、恰も耳かくしやうのものが附加されてゐることである、附圖の當麻寺門前の圖の中央の瓦葺の二階にもそれがある。土造では必ずこれを附加すると見えて、但馬國美方郡小代村神場の上治理學士の本宅も、やはり三代前に建つた切妻の瓦葺で樓烟出し付の屋根であるが、二階の兩端にこれがついてゐる上治君はこれを「火よけ」と呼ぶといはれた、この例至る所に多い、岡山西大寺の町でも見た、中國一帶四國にもこれが行渡つてゐると思ふ。

第七圖

京都笹屋町卯建ある家

　岡寺の藥屋といふ宿に泊つたが、こゝも瓦葺切妻平入であつたが、古い家で天井は竹簀子をばらつとしいて、杉皮をのせ、其上に土が二寸程ものせてあつたこの土造の天井のつくり方は大陸風であると思ふ、大和河内邊の古い瓦葺を土造といふが、天井にこの土をのせてゐる例が甚だ多い、防火壁の用意は必ずしも卯建とて、家の側面のみでなく、天井に迄及んだものである。この點については大陸の建築との關係を考

量にいれねばならぬと思ふ、瓦葺もしくは板葺に關しては後節更らに章を改めて論ずるが、北越の海岸から甲州、關東邊にも切妻の家が多いことをこゝに附記しておく。

ことにこの切妻の妻の裝飾を餘程美しくしたものが、信州にあるとの事である、切妻屋根だけでも注意すべき事は甚だ多い千種萬態である、これ蓋し其の由來尤も古くして、簡單なるが爲めに後世之に工夫を加ふること尤も多い故であらう。

朱子文集を見ると

厦屋則前五間後四間、但五間皆爲横棟、横棟盡所有版下垂、謂之搏風

とある、この文は切妻平入で間口五間奥行四間のものを厦屋といひ、これを他の四阿殿堂なるものと區別してゐる、五間皆横棟であるから屋根は切妻である、兩下である、横棟盡くる所に板あり下垂すとはこれ卽ち我國で懸魚といふ風のもので、信州や甲州邊の切妻の端に、特別の細工があるといつたものと同じい事實を記してあるのだ。之を搏風（ハフ）といふとあるは我國入母屋の破風と同じことである、何にしてもこの朱子の文を見ると、それと日本の切妻とに何等の交渉がないとは云へないと思ふ。（未完）